

きつねのこうやく

再話・絵 山田辰美

これは藤枝の宿に伝わる昔のお話。

昔と言っても江戸時代のことだよ。

藤枝は東海道の宿場として

ずいぶんにぎわっていたが、江戸時代は

電車もなければ、自動車もなかった。

東海道を横切る瀬戸川を渡る橋もなかったんだ。

東海道を行き来する旅人は、仕方ないので

川越え人足に背負ってもらって

川を越えていたそうだ。

それで瀬戸川の川べりに切り傷に

よく効く塗り薬が売られていて、

たいそうな評判だったそうだ。

「狐の膏薬」と呼ばれていた

その薬のお話、お話一。



こんこん、こんこん、
「こーんばんは、悪いけえが」

瀬戸川の土手の上にある
川越え人足小屋の玄関戸を
誰かがたたいている。

「うるせーなー、

こんな夜中に誰だい」

川越え人足のリキが
杉板の戸の節穴から外をうかがうと、
そこには鼻筋が通った美しい娘が
月明かりに照らされて立っていた。



「何だ、今時分」

「川向こうにいるおっ母さんの様態が悪いんです。

すいませんが、向こう岸に渡してくれませんか。

お礼ははずみますから。」

切れ長の目の娘は手を合わせて頼んだ。

「そういうこんならしょんないなあ。」

念のため懐に刃物を忍ばせてリキは身支度をした。

「よっこらしょい。」

リキは娘を軽々と背負って、川を渡り始めた。

桜のつぼみがほころび始めたとはいえ、夜の水はまだまだ冷たい。

「う、冷っこいなあ。おっかさんはそんなに悪いのかい。」

「長患いの母を残して嫁いたのですが、今日は虫が知らせて
矢も立てもいられず…気がかりで気がかりで。」



そんなやり取りをしているうちに、川を渡りきった。

「久しく雨がなかったもんで、今日はひざ下だったで、五文おくれ。」

「そうゆう訳にまいりません。お陰で母の看病ができます。

どうぞ十文取って下さい。」

「いいんだよ。孝行なあんたから余分な駄賃は取れねえよ」

そんな押し問答をされていて、五文銭がリキの掌から落ちた。

瀬戸川の石ころの川原にチャリンと音がするはずだが、

はらりと静かに落ちた。

川原に落ちた五文銭は土手に生えているエノキの葉っぱに変わった。

娘はオタオタとうろたえて、リキの様子をうかがった。



リキの表情がにわかに変わった。

「てめー、何もんだ。」

そう叫ぶと、いきなり刃物で切りつけた。

「あーっ」



娘は身をひるがえして逃げようとしたが、
二の腕を切られてしまった。

「きゃいーん」



娘は狐だったのだ。

片腕を失った狐は一目散に土堤をかけあがり、闇へと消えた。

数日たった晩のこと、

こんこん、こんこん、

「こーんばんは、悪いけえが」

聞き覚えのある声だった。

片腕のない狐が、川越え人足小屋の前にチョコンといた。

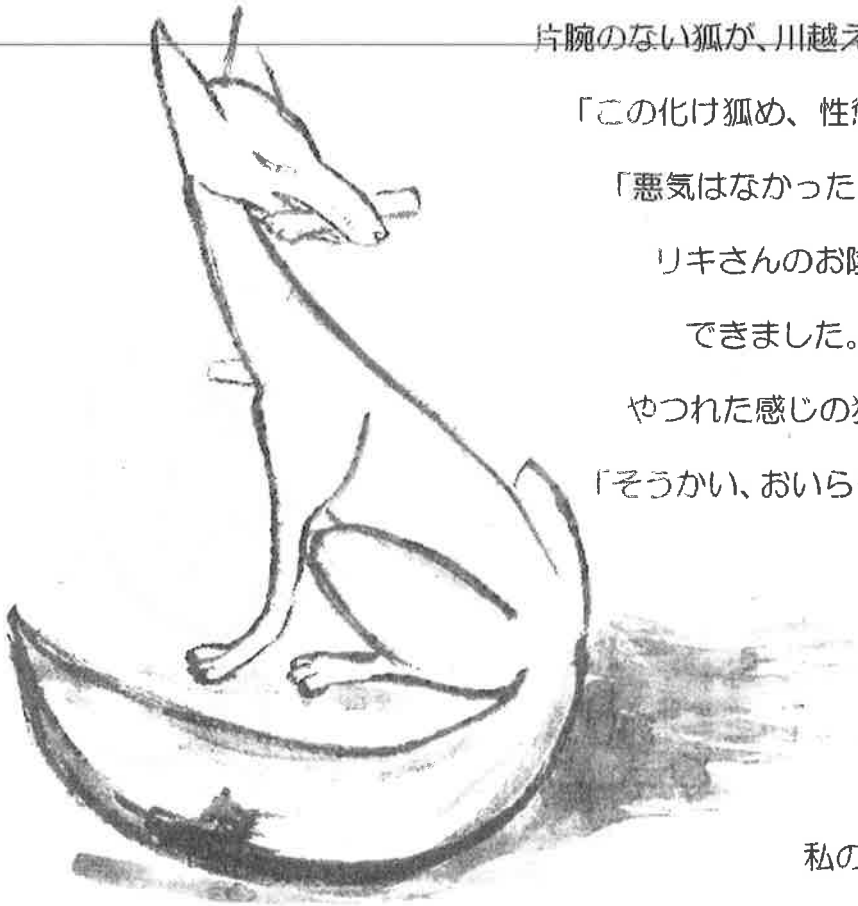
「この化け狐め、性懲りもなしに又来たのか。」

「悪気はなかったのです。堪忍してください。

リキさんのお陰で、母の死に水を取ることが
できました。」

やつれた感じの狐を見て、

「そうかい、おいらも切りつけたりして悪かったな」



「お願いします。

私の手を返していただけませんか。」

「今さら腕を返してもどうにもならんら」

狐の話によると、一族に伝わる塗り薬を使えば、腕は元に戻ると言うのだ。

リキは腕と引き換えに、薬のこしらえ方を教えてもらうことにした。

それから間もなく、川越え衆の用いる塗り薬どんな傷にもよく効くと
街道筋で評判になった。

リキは川越え人足を止めて、瀬戸川の川べりに薬屋を出したそうだ。

その店の看板には狐の絵が描かれ、狐の膏薬と書かれてあったということだ。

チョキン、おしまい。